

THE HOTEL NEW HAMPSHIRE

John Irving

■新潮・現代世界の文学■

ホテル・ニューハンプシャー 〔下〕

J・アーヴィング

中野圭二 訳

新潮社



THE HOTEL NEW HAMPSHIRE
by John Irving
Copyright ©1986, Garp Enterprises, Ltd.
Japanese translation rights arranged
with Literistic, Ltd.
through Japan Uni Agency Inc., Tokyo

ホテル・ニューハンプシャー (下)

ジョン・アーヴィング なかの けいじ
 中野 圭二訳

発行 1986.6.25 2 刷 1986.7.10
発行者 佐藤亮一
発行所 新潮社 東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808／〒162
電話 業務部(03) 266-5111／編集部(03) 266-5411
定価 1700円
印刷所 株式会社光邦
製本所 大口製本株式会社
©1986 Keiji Nakano, Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り)
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-519102-0 C0097

ホテル・ニューハンプシャー(下)／目次

第八章 ソローは漂う

第九章 第二次ホテル・ニューハンプシャー

第十章 オペラ座の一夜

—— シュラークオーバースと血 ——

第十一章 フラニーを恋すること。

チップー・ダヴを処理すること。

第十二章 ねずみの王様症候群、

最終ホテル・ニューハンプシャー

訳者あとがき

ホテル・ニューハンプシャー
(下)

第八章 ソローは漂う

インターホンをとおして聞いたロンダ・レイの息遣いにぼくはまずむらむらつときたわけだが——いまでもぼくは睡眠中に（ときおり）彼女の温かく、強く、重い腕を感じる事ができる——そのロンダ・レイは第一次ホテル・ニューハンプシャーをついに去ることはなかった。彼女はそのまま残ってフリッツ一座に忠誠をつくし、彼らによく仕えた——たぶん、年をとるにつれて、こびとの給仕をし、ベッドを整えることは、もつと充分に成長したおとなのためにしてきた仕事よりまるでましであることを発見したのだろう。いずれフリッツはぼくたちに手紙をくれて、ロンダ・レイが——「眠っているあいだに」——死んだと告げることになる。母さんとエッグを失って以来、どんな死もぼくには「ふさわしい」とは決して思えなくなるが、フラニーはロンダの死はふさわしいと言った。

少なくとも、マックス・ユーリックのこの世からの不幸な訣別に比べればふさわしくはあった。彼は三階のバスタブのなかで人生に屈服したのである。おそらくマックスは、四階の小型のバスルーム設備と、こよなく愛した隠れ家を明け渡さなくてはならなかった怒りを鎮めることはついでにできなかったであろう。なぜなら、想像するに彼は、こびとが頭の上で生活している実際の物音は

たとえ聞えなくても、そう思うだけで悩まされたからだ。ついにマックスの命を奪ったのは、おそらく、エッグがソローを隠そうとしたあのバスタブではないかと、ぼくはいつも考えた——もう少してオチビ・タックに対しても首尾をとげるところだったあのバスタブである。フリッツはどのバスタブということはひとことも触れず、ただ三階とだけ書いた。マックスは入浴中に心臓の発作を起したらしかった——したがって、溺死したのだ。海の底から何度となく戻ってきた老水夫が、バスタブのなかで果てるというのは、気の毒なユーリックのかみさんにとって懊悩の種だった。彼女にとってマックスの死はふさわしくないことおびたしかった。

「四百六十四回、ね」ぼくたちのあいだでマックスの名前が出るたびに、フラニーは飽きずに言った。

ユーリックのかみさんは、今日でもなおフリッツ一座の料理人である——たぶんそれは、料理と生活がありふれているけれどよいことを裏付けているのであろう。あるクリスマスに、リリーは古代英語から訳した無名詩人の次の言葉を、美しい巻紙に書ききで書いて、彼女に送った。「つましく生きるものは、天国の御使いたちによって勇氣と力と信念を授けられる」アーメン。

フリッツ一座のフリッツはたしかに同様の天使の加護を受けていた。彼はデリーで引退し、ホテル・ニューハンプシャーに一年中住むことになる（もはや若いこびとたちと旅に出ることも、冬のサーカス巡業をすることもなくなつて）。リリーは彼のことを思い出すたびに悲しくなつた。なぜなら、最初に彼女に感銘を与えたのが、フリッツの小さなからだだったとすれば、リリーがフリッツのことを思い出すたびに想像したのは、（ウィーンに行かないで）フリッツのホテル・ニューハンプシャーで暮している様子だったからだ——そしてリリーはそれ故に、ぼくたちが母さんもエッグも失つていなかったら、みんなの生活がどう違つていただろうかと想像した。天国の御使

たち“はどれも、二人を救うためにその場に居合わせなかった。

しかしもちろん、初めてウィーンを目にしたとき、ぼくたちは世の中をそんなふうには見ていなかった。フランクのいう“フロイトのウィーン”である——フランクがどっちのフロイトを指しているかは、みんなわかっていた。

一九五七年のウィーンの街はいतरところ、建物のあいだが歯が抜けたようにすいていた。崩れて風通しのよくなった建物があり、爆撃されたままの形をそのままとどめている建物があった。瓦礫の積み上げられた空地——子供たちに見棄てられた遊び場の周辺など——に、かき集めてきちんとまとめた残骸のなかにはまだ不発弾が埋れていそうな印象を受けた。空港から市の郊外にはいる途中に、一種の記念碑として、コンクリートにしっかりと固定されたソ連の戦車があった。戦車上部のハッチからは草花が生え、長い砲身に旗が巻きつき、戦車についている赤い星は色褪せ、小鳥についばまれて斑点だらけだった。郵便局らしきものの前に永久にそれは停まっていたが、郵便局だったかどうかは、ぼくたちのタクシーが猛スピードで走りすぎたので、確かめようがなかった。

ソローは漂う、しかしぼくたちがウィーンに着いたのは、悪い報せがはいる前で、ぼくたちは用心しながらも楽天的な気持ちに傾いていた。市内に近づくにつれて、戦争の被害は封じ込められているところが多くなり、ときには、精巧な建物のなかに日の光すら射し込んでいた——そして一列に並んだ石造のキューピッドが屋根からぼくたちの頭上に身を乗り出し、その腹部には機関銃による穴があばたのようについていた。道行く人も多かった。それにひきかえ、市外の地区は、朝、みんなが起きる前の時間——あるいはみんなが殺されたあと——に撮った古いセピア色の写真に似ていたと言えるだろう。

「おぼけかなんか出そうだわ」リリーが思い切って言った。恐怖に脅えて、彼女もとうとう泣き止んでいた。

「古いよ」フラニーが言った。

「わが楽しかりき日々はいずこ」フランクはドイツ語で陽気に歌い——どこかにそれがないかときよろきよろ見まわした。

「母さんはここが気に入ると思うよ」父さんが楽天的に言った。

「エッグは気に入らないわ」フラニーが言った。

「エッグには聞えないさ」フランクが言った。

「母さんも大きらいよ」とりりー。

「四百六十四回」フラニーが言った。

運転手が何か意味のわからないことを言った。それがドイツ語でないことは、父さんにすらわかった。フランクはその男と話をしようと奮闘した結果、彼がハンガリー人だと判明した——最近の革命から流れてきたのだ。ぼくたちはバックミラーを覗き、運転手のどんよりした目に、消え去ることのない傷の兆候を探した——それを見はしなかったにしても、ぼくたちは想像した。それから、ぼくたちの右側を、公園が飛んでゆき、宮殿のように美しい建物（実際に宮殿だった）が流れ去り、中庭の門から、看護婦の制服を着た陽気な、太った女（明らかに乳母）が二人用乳母車（誰かが双子を産んだのだ！）を押して出て来た、そしてフランクはとおり一遍の旅行パンフレットから、ばがげた統計の数字を読み上げた。

「人口百五十万人足らずの都市ウィーンには」フランクはぼくたちに読んで聞かせた。「いまでも三百軒以上のカフェがある」ぼくらはタクシーの外の通りを凝視し、カフェにはコーヒーのしみがついているのではないかと期待した。フラニーは窓ガラスをおろし、くんくんにおいを嗅いだ。ヨーロッパ特有のデューゼルの強烈なおいはしたが、コーヒーのおいはしなかった。カフェなるものが何のためものかはいずれすぐにわかった。そこで長時間暇つぶしをしたり、宿題をしたり、

街の女と話をしたり、ダーツやビリヤードをしたり、コーヒーだけでなくもつとほかのものを飲んだり、計画を練ったり——ぼくたちの脱出の——そしてもちろん、不眠症の人や夢みる人のためでもあった。しかしそれからぼくらはシュヴァルツェンベルク広場の噴水に目がくらみ、市電が賑やかに走るリング通りを横切ったところで、わが運ちゃんコンディットライは念仏のように節をつけて唱えた。「クルーガー通り、クルーガー通り」まるでそれを繰り返すと、その小さな通りがぼくたちに向って飛び出してくるかのように（実際そうだった）。それから、「ガストハウス・フロイト、ガストハウス・フロイト」

ガストハウス・フロイトはぼくたちに向って飛び出してはこなかった。運ちゃんがゆつくり走らせていたのにそばを通りすぎてしまった。フランクがカフェ・モヴァットにとびこんで、道を訊いた。ぼくたちに指し示されたのは、通過したばかりの建物だった。キャンデー・ストアはなくなっていた（もつとも、前の菓子店コンディットライの看板——ボンボンその他——はウインドーに内側から立てかけてあった）。父さんはそれを見て、フロイトが——ぼくたちの到着に備えて——拡張計画に着手し、キャンデー・ストアを買収したのだと思った。しかし、もつとよく見ると、菓子店コンディットライは火事で焼けたのだということがわかった。そして、となりのガストハウス・フロイトの住人も、少なくとも、肝を冷やしたにちがいがなかった。ぼくたちは内部がすっかり焼け落ちたキャンデー・ストアのかたわらに新しく取りつけられた看板のそばを通って、小さな、薄暗いホテルのなかにはいった。看板には、「砂糖を踏みつけるな」と書いてある、とフランクが翻訳した。

「本当に、砂糖を踏みつけるな、なの、フランク」フラニーが言った。

「そう書いてあるよ」フランクは言った。事実、ガストハウス・フロイトのロビーにおそろおそろはいつて行ったぼくたちは、床の上がねばねばするのを感じた（まぎれもなく、砂糖の上を歩いた足の仕業だ——火事で溶けたキャンデーの忌むらしい光沢）、そしてこんどは、焼けたチョココレート

のおぞましいにおいがぼくたちを包んだ。リリーは、小さなバッグをかかえてよろめきながら、まっ先にロビーに転がりこんだ、そして、悲鳴をあげた。

ぼくらはフロイトのことは頭にあったが、フロイトの熊のことは忘れていた。リリーは熊がロビーにいたとは——しかも鎖につながれずに——思ってもいなかった。そしてぼくたちの誰一人として、熊がフロントのそばのソファに、腕組みをし、かかとを椅子の上にのせて、すわっているとは予想もしていなかった。それは雑誌を読んでいるようにみえた（フロイトが断言したように、どうやら「利口な熊」らしい）。しかしリリーの悲鳴にぎよつとなり、頁がばらばらとめくれて手から落ち、熊は動物らしい格好に戻った。ソファからひらりとびおり、ぼくたちを尻目に、フロントのほうに斜めに悠然と歩いて行つた。それが非常に小さいのをぼくたちは見た——ずんぐりしてはいるが、体長はそれほどなく、ラブラドル種のレトリバーと変らない（と、みんな考えていた）。しかし毛並みははるかにふさふさし、腰も太く、尻も大きく、腕も太かった。熊は後足で立ち上がり、フロントのベルを激しく叩いた。あまり勢いがすぎまじかったので、小さなチリンというベルの音が動物の手のバシツという音に揉み消されてしまった。

「やれやれ」父さんが言つた。

「そこにいるのはお前か」なから声が叫んだ。「ウイン・ベリーかな」

熊は、フロイトが依然として現われないのに苛立つて、カウンターの上のベルを掴んで、ロビーのほうに投げつけた。ベルはものすごい勢いでドアにぶつかった——ハンマーでオルガンのパイプを殴つたような音がした。

「聞えてるぞ」フロイトが怒鳴つた。「やれやれ。そこに来たのはお前かね」そして彼は腕を広げて部屋から出てきた——ぼくたち子供にとつては、熊に劣らず異様な姿だった。父さんの口癖の「やれやれ」はフロイトから学んだのだと、そのとき初めてぼくたち子供は知った。そしてそれに

してはフロイトの体が父さんとちがいすぎることに、ぼくたちはおそろくびつくりしたのだと思う。フロイトの体は、父さんのスポーツマンの体型や動作とは似ても似つかなかった。フリッツがこびとたちに票をいれさせたとしたら、フロイトは彼らのサーカスに入団できたかもしれない——彼はこびとたちよりほんの少し大きいだけだった。その体は、以前もっていた力にまつわる歴史のダイジェスト版になってしまったようだった。いまはただかたく小さくまとまっているというだけだった。話に聞いていた黒髪はもはや白く、長くのび、風にほんろうされるともうこしの毛のようにぼよんとしていた。棍棒か、野球のバットのような杖を持っていた——あとで、本当に野球のバットだとわかった。頬にある毛の生えた奇妙なほくろは、いまでも普通のコインの大きさだったが、色は歩道のような灰色だった——都会の通りのものも何とも形容しがたい、ないがしろにされた色だった。しかしフロイトが老けたなと思わせる主たる要因は、彼の目が見えないことだった。

「そこにいるのはお前か」フロイトはロビーの端から呼んだが、顔は父さんのほうではなく、階段の手すりの端の古い鉄製の支柱のほうを向いていた。

「ここですよ」父さんはやさしい声で言い、フロイトは腕を広げて、父さんの声のするほうを手探りした。

「ウイン・ベリー！」フロイトが叫ぶと、熊が軽い身のこなしでフロイトのそばに行き、老人の肘をざらざらした手で掴んで、父さんのほうへ押した。はみ出しておかれていますかもしれない椅子や人の脚につまずくのをおそれて、フロイトが歩調を弛めると、熊がうしろから頭で押した。ただの利口な熊というだけではない、とぼくたち子供は思った。まるで盲導熊だった。フロイトにはいまい自分の目の代りをしてくれる熊がいた。まぎれもなく、これは人の生活を変えることのできる熊だった。

目の見えない、醜くくて小さな老人が父さんを抱き締めるのをぼくたちは見た。ガストハウス・

フロイトの陰気臭いロビーのなかで不様に踊る二人をぼくらは見ていた。二人の声がおさまつてくると、二階のタイプライターの音が耳にはいった——過激派が彼らの音楽を作っていた。左翼が彼らの世界観を書き上げていた。タイプライターすら自信に満ちた音を響かせている——彼らが攻撃している他の世界観はすべて欠陥だらけであり、自分たちこそが正しいと確信し、絶対的に信奉し、待ち切れないようにテーブルをとんとんと叩いて話の合間の時間を刻む指のように、かたかたかたと言葉を叩き出していた。

しかしこのほうが、夜、着くよりはよかつたものではあるまいか。不十分な照明によるやわらかい光と、こまかいことはとがめだてしない暗がりに包まれていれば、文句なしに、ロビーは手入れが行き届いているように見えはしただろう。しかし（ぼくたち子供にとつては）タイプライターの音を聞き、熊を見るほうがまだましだったのではあるまいか——ベッドの軋む音や売春婦が階段をあがつたり降りたりする足音やロビーで罪のにおいのただよう挨拶や別れの言葉（それは一晚中途絶えることがない）を聞く（あるいは想像する）よりは。

熊がぼくたち子供に鼻をすり寄せた。リリーは警戒し（彼女より大きかった）、ぼくは何となく恥ずかしく、フランクは——ドイツ語で——愛想を振りまこうとしたが、熊はフラニーにしか目をくれなかった。熊はその大きな頭をフラニーの腰に押しつけ、鼻づらでぼくの姉の股間を突いた。フラニーは飛び上がり、声をたてて笑った。すると、フロイトが言った。「スージー。お前はいい子にしてるんかな。それとも何かいたずらをしてるのかね」熊のスージーは彼のほうを向き、短い距離を、四つん這いになって、彼に駆け寄った。熊は老人の腹部を突き——床に倒した。父さんが割ってはいりそうに見えた。しかしフロイトは——野球のバットにすがって——立ち上がった。彼がくすくす笑っているのかどうか、よくわからなかった。「おいおい、スージー」彼は見当違いのほうを向いて言った。「スージーはいいところを見せたいのさ。批判されるのは好きじゃないんだ」